

・復活後の40日間

主イエスは、復活後弟子たちに現れ、その後、一生弟子たちと共にいたのではありませんでした。死から復活できるのですから、この地上で永遠に生きることもできたでしょう。しかし、そうされません。40日の間、弟子たちと生活を共にし、神の国について語ったのです。

「イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。」(マルコ1:14-15) 主イエスが公に活動されたその始まりから、復活後に至るまで、主イエスは神の国の福音を語ったのです。主イエスの死によって、この国はどうなるのだろうか、自分たちの救いは来るのだろうか、という思いの中にあった弟子たちにとって、神がいてくださるから、どんな時も大丈夫だ！いつも主イエスがどう生き方かに倣い、歩もうという力強い恵みの言葉を、食事と共にいただき続けたのです。

私は今日「40日間」(3節)、の「40」という数字に特に励まされます。聖書には「40」という数字がよく出てきます。主イエスが、荒野において、断食し、悪魔の誘惑を受け、退けたのも、40日間という期間でした。そして、エジプトにおいて長い間奴隷であった民たちが、モーセによって導かれ、約束の地イスラエルに辿りついたのも、40年間でした。荒野にてユダヤの民たちは過ごしたのです。荒野。作物が取れる場所ではありません。水もそうです。生きるための最低限のものが、大変手に入りづらい。しかし、神は民たちに必要なものを備え、共に歩んだのです。主イエスの断食における荒野においても、天使たちが共にいて、野獣から守ったのです。

今、私たちは「いつまでこの状態が続くのだろうか」という思いの中を歩んでいます。子ども達にとって、学校や幼稚園が3月から休みに入って、もう2か月、60日以上が経ちました。愛知県では5月末まで、休みになるとのことですし、全国一律での9月に、新年度スタートという改革の声も聞かれています。ただ9月スタートになれば万事OKというだけでなく、これまでの60日間過ごしてきた子ども達の気持ち…友だちとそれまで会えるのだろうか、学校に本当に行けるのだろうか、大人のいう事は本当か…まだまだ様々あるでしょう、子ども達の思いを置き去りにしたくはありません。本日のS姉の証しの中にあつたように、この期間、家族で過ごす恵みがあり、私もそれを実感している一人です。一方で働く親や、家で子ども達を観る環境もそれぞれに変化や緊張があり、疲れを覚えている人も少なくありません。私自身、子ども達が敏感に非日常であること察し、親に気を遣っているなあと思う時があれば、子ども達の不安が、突然感情が涙となって溢れだすような時もあります。「いつまで続くのだろうか」という思いの中で、いきづまりを感じることもしばしばです。

しかし「40日間」荒野で過ごす主イエス。また「40年間」荒野で過ごした主の民たちから、学ぶのです。何もない。なくなってしまった。そのところで、尚主なる神様は、その叫びを聴き、共にいて、私たちに生きる一切を備えてくださるということ、です。泣いていいし、不安に思っている。民たちも、荒野でそうした感情の動きがあつたのです。しかし、尚、そこから、主に「助けて」と叫んだのです。私たちも、40か月か、40年か分かりませんが、今それぞれに歩んでいる荒野において、神に祈り求めたいのです。「それから長い年月が経ち、エジプト王は死んだ。その間イスラエルの人々は、労働のゆえにうめき、叫んだ。労働のゆえに助けを求める彼らの叫び声は神に届いた。」(出エジプト2:23) 私たちの祈り、叫びは、必ず神に届き、神は私たちに向かって動いてくださるのです。

## ・聖霊による時

主イエスと弟子たちの40日間にも、いろんな出来事があつたでしょう。主イエスが十字架につけられる前に弟子たちは皆逃げ去ってしまった、裏切ってしまったということ、ここ数週間、話してきました。主イエスは、復活された後、すぐにその弟子たちに会いに来て、「あなたがたに平和があるように」(ヨハネ20:19)と伝えました。そしてすぐに去つたのではなく、40日間を共にしたのです。平和の思いが主イエスと弟子たちを囲むような時間だつたでしょう。

弟子たちには、焦りがありました。「主よ、イスラエルのために国を建てなおしてくださるのは、この時ですか。」(6節)主イエスの復活により、神の国がくる。それでは、主イエスを死においやつたローマ帝国や、ユダヤの国の現体制に対して、その変革が行われるのではないか。自分たちのもとに、救いがやってくるのではないか。主イエスの弟子たちのまわりの視線は、このとき何も変わっていませんでした。弟子たちは皆、ヒソヒソと集まっていました。国家反逆罪のユダヤ人の王、ナザレのイエスの弟子だと、人々から思われていたからです。こうした苦しい立場から、解放されるのではないか。ユダヤ教にある終末の希望、世の終わりの日に完成する救いが、いよいよ起きるのだ、という期待もあつたでしょう。

これに対して主イエスは、時を待つように、弟子たちに告げます。聖霊のバプテスマ(5節)が与えられ、聖霊を受けると、あなたがたは力を受ける(8節)と約束されました。その時は、人には分からないということです。神が与えて下さる時があるのです。聖霊による時であり、それにより、主イエスの言葉を頼みとする弟子たちは力を受け、変えられ、ユダヤやサマリア、地の果てまで、遣わされていく。主イエスの証人となる、御言葉を宣べ伝える者となるということです。

今、特に学校がどうなるだろうか、勉強は、学年はどうなるだろうか、という思いの中にある子ども達、中高生や、大学生たちに伝えられる経験の話として、この「聖霊による時」、という言葉があります。私は、高校卒業後、一浪し、その時、神さまからの招きを受けて、牧師になろうと決意し、西南学院大学神学部に1年次で入学しました。牧師になるための場所。どんな人たちがいるのだろうか、と思つてワクワクしていましたが、特に驚かされたのは、ほとんど自分と同じ世代がいない、ということでした。神学寮の隣の部屋の方は、私の2倍の歳。逆隣の部屋は3倍の歳の人でした。皆、それぞれの人生があり、仕事や家庭があり、キリスト教信仰をもつたのも、皆が違う。30代で、仕事をやめて牧師に召されたと言う人もいれば、40代で、50代、60代で、と本当に多様でした。それぞれの方から、どうして牧師になろうと思つたのですか?と聴くと、それぞれに神さまが招いてくださった時があつたのだと知り、でも同じ神の働きに就けるのだという面白さがありました。聖霊による時。皆、自分の人生のストーリーを描きます。漠然としたもの、具体的なもの。長期的なもの、短期的なもの。様々ですが、皆、どこかに、「これが私の人生だから、私が決める」という思いがあります。しかし、主イエスの言葉に生きるならば、私たちは、私の人生をしっかりと見つめながらも、神様の時、神さまのストーリーに自分の人生を委ねていく、そういう生き方、時間の捉え方があるということをおぼすのです。牧師になつた仲間、先輩、後輩たち皆が、それぞれの場所で、イキイキと、この時も仕えている。あの人よりも遅くて、とか早くてという時間の見方ではなく、今、この時に、神さまが招いてくださっている生き方がある、時がある。それを受け止めて歩む幸いがある、ということ、今日皆さんと分かち合いたいのです。

神に招かれた働き、それは聖霊による「和解」の働きです。聖霊の働きは、聖書に様々書かれてありますが、今日、特にこの赦しと和解の働きを覚えたいのです。

「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたを赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦されなければ、赦されないまま残る。」(ヨハネ20:22-23)

今、コロナのことで、多くの人が「当たり前」ではない、これは自分の願った時ではない、というその生活を余儀なくされています。いつもと違うという出来事の中で、ストレスが募るのもやむを得ません。しかし、その中で起きている分断や差別の出来事に心を痛めるのです。「あの人は自粛していない」「あの人はコロナにかかった」…自分は守っているのに、または、感染させてはいけないという正義感が、「自分と他人は違う」という線引きを生みだし、傷付ける言葉が発せられるのです。私たちはこの分断を生んでいるものが、何なのかをよく注視し、思い巡らしたいと思います。休むことができない、生きるためにそのことを選んでいられる人がいるかもしれない。その言葉を言われたら、自分はどう思うだろうか。罪とは何か、赦しとは何か。聖霊の風を受けながら、私たちは、今、分断ではなく、一致を。傷つける言葉ではなく、赦しと和解の言葉を心から表したいのです。教会においても、様々な選び取りがあります。礼拝を続けることが、今誰かのいのちの危機に寄り添うことなのだ、と、選び取る教会があります。愛する家族、教会の一人ひとりを守るために、礼拝をお休みしている教会もあります。それぞれの選び取りを思いたい。礼拝に来たくても来られない人がいる。祈ることもできない、という人がいる。そして礼拝にどうしても行きたい、という人がいる。それぞれの思いを私たちは思いめぐらし、尊重し、聖霊の力によって、励まし合いたいのです。

#### ・帰っていく場所、また会えると言う言葉

主イエスは、「わたしの証人となる」という言葉を残し、弟子たちの前で、天に上っていかれました。復活して、また死ぬ、という別れではなく、「またおいでになる」という約束を残して、天の父のもとに帰っていかれたのです。

私たちは、今、生きるという事、死ぬということを豊かに考える時間を与えられています。死んだら、終わり。その死の捉え方に縛られて生きるのであれば、私たちの生は、どんなに長く生きたとしても、ただ死を恐れ、死から逃げるためだけの生となるでしょう。しかし、私たちは、様々な人々の生と死から、主イエスの生と死、そして復活から、学んできたのです。死は終わりではない。また会えるのだ、という希望の約束に生きることが、私たちの人生の折々も、死の時も尚、豊かにしてくれるということを、です。

長く生きることができる。恵み深いことです。しかし、私たちは、たとえ人々からどんなに短い生だと思われたとしても、そこに私たち一人ひとりが、「ああ、よかった」と思える出会いがあれば、どうでしょうか。わたしは一人ではない、主が共にいてくれる、という思いがあればどうでしょうか。いのちが、神さまからきて、神さまのもとに帰ることができる、その思いがあればどうでしょうか。

応答讚美歌、73番「善き力にわれ囲まれ」は、ディートリッヒ・ボンヘッフアというドイツの神学者、牧師が獄中で書いた詩です。彼はナチス・ドイツによる侵略や迫害に対して、真っ向から闘い、また、それが赦されない罪だと分かっているながら、ヒトラー暗殺計画に加わりました。その計画がばかかれ、投獄され、戦時中に39才で処刑されたのですが、彼の生きざまは、時を越えて、私たちにキリストを証しし続けています。

コロナ禍、世界中全ての人が痛みの中にある。教会もまた、痛みの中にある。一人ひとりに、痛みがある。その中で、尚主イエスが共にいて、また出会ってくださるという約束の希望をいただいて、この賛美を共に献げ、新しい一週も共に過ごしていきたい。そして、私たち一人ひとり、折がよくても悪くても、御言葉を宣べ伝え、痛みの中にある友を覚え、聖霊の時を待ち望みたいのです。